

第一次世界大戦勃発 100 周年とドイツ

西山 暁義

1. はじめに

第一次世界大戦が勃発してちょうど 100 年、2014 年はドイツをはじめとするヨーロッパ諸国においてさまざまな催しが開かれており、ドイツだけでもそれを見渡すことは困難なほどである。また、第一次世界大戦が長期戦となったこともあり、これらの記憶のためのイベントも、4 年間の長期的な企画になっているものも多く、ヴェルサイユ条約 100 周年まで含めれば、5 年間に及ぶことになる。同様の世界史的イベントであるフランス革命の 200 周年記念行事が、その「終点」を定めることの難しさや、人権宣言などのポジティブで普遍的であるとみなされる出来事が初年度に集中していたせいも、ピンポイントで 1989 年に限定されていたのに対し、今回の第一次世界大戦 100 周年は、記念行事自体が複数年にまたがるものである⁽¹⁾。そのため、初年度すらまだ終わっていない現在、記憶文化における大戦 100 周年の意味を考察するには時期尚早であろう。しかし、他方で「20 世紀の破局の淵源」である大戦が勃発した年として、すでにさまざまな議論が行われていることも確かである。以下では、この 100 周年初年度（とそれにいたるここ数年）における、ドイツの大戦に対する記憶とそれをめぐる議論について、紹介することにした。

2. 連邦政府の消極性

第一次世界大戦はよく、ヨーロッパの没落をもたらしたものであると同時に、それがヨーロッパ統合への原動力にもなった出来事であると指摘される。ヨーロッパ懐疑論が強まる現在、このヨーロッパ統合の「起源」の記憶は重要な政治的意味を持つことが想定され、とりわけ、統合の中核にあるドイツの場合、それは一層当てはまるものと考えられるかもしれない。

この想定は、部分的には正しく、部分的には誤ったものである。正しいのは、ドイツの大戦の記憶をめぐる言説において、大戦を「ヨーロッパの破局」として描き、そこから第二次世界大戦とホロコースト、冷戦を経てヨーロッパ統合に至る過程を歴史的な使命とみなしている点である。これは、すでに 2009 年、ベルリンの壁崩壊 20 周年の式典の 2 日後にパリで開催された休戦（フランスにとっては同時に戦勝）記念日に、ドイツの首相として初めて参加したメルケルの演説に

(1) “Leçons croisées sur un centenaire: Entretien avec Jean-Noël Jeanneney et Joseph Zimet”, *Les collections de l'Histoire*, No. 61, 2013, pp. 108. ただし、フランスでは関心の拡散を避けるために 2014 年 11 月にすでに終戦のイベントが開催されている。

おいても明らかである。当時のフランス大統領サルコジが大戦そのものに深く言及し、平和創出の困難さを指摘したのに対し、メルケルは大戦からベルリンの壁崩壊に至る20世紀の苦難の歴史をふまえ、ヨーロッパ統合における独仏間の和解の重要性を強調している⁽²⁾。2014年においても、ドイツ連邦大統領ガウクが大戦100周年を第二次世界大戦勃発75周年(1939年)、ベルリンの壁崩壊25周年(1989年)という記憶の連鎖のなかに位置づけているのに対し、フランス大統領オランダの場合は第二次世界大戦におけるフランス解放70周年(1944年)と結び付けている。極言すれば、ガウクはよりヨーロッパの結束を強調するのに対し、オランダはフランスの国民的アイデンティティーの回復に主眼をおいており、国家間における記憶の相違を浮き彫りにしている⁽³⁾。

一方、誤っている点は、連邦政府はむしろ記念行事に消極的であるということであるが、それはまさにこの正しい点とも関連している。一つは、20世紀前半のドイツ史のナラティブが収束していく「消尽点」が1933年のナチス・ドイツの政権獲得、あるいは1939年の第二次世界大戦の勃発に置かれ、第一次は第二次の前史として、いわば陰の存在として扱われてきた、ということである⁽⁴⁾。そしてもう一つは、現在のユーロ危機においてドイツがヨーロッパの財政規律の監視人的な役割を果たすなか、歴史教師まで演じることによって自国に対する反感をさらに煽ることは避けたい、という外交的な配慮があったことも否定できない。

実際、イギリスやフランスでは、政府が実行委員会を立ち上げるなどして、積極的に記念事業に関与しているのに対し、ドイツ連邦政府はむしろ消極的であると見られている。英紙『サンデー・タイムズ』の2014年3月の記事は、「ドイツでは第一次世界大戦は忘れられた戦争である。我々が現代世界を形成した大戦の4年間に及ぶ記念に乗り出そうとする一方で、ドイツはほぼ沈黙に近い状況にある。たしかにいくつかの記念行事が計画されてはいるが、投入される金額は最小

(2) Élise Julien, *Asymétrie der Erinnerungskulturen. Der Erste Weltkrieg in Frankreich und Deutschland*, DGAPanalyse, Heft 13, 2014, S. 15.

(3) Wolfgang Jäger, „Gedenktage stehen im Licht der Gegenwartsprobleme“, *Badische Zeitung*, 12. 7. 2014. むろん、こうした相違にもかかわらず、独仏間の共同の記念行事の場においては、ヨーロッパの統合、独仏和解の意義が強調されることは言うまでもない。ドイツの対仏宣戦100年にあたる2014年8月3日、アルトマンスヴィーレールコブ(アルザス南部)の戦没者墓地において、ガウクとオランダは1984年のヴェルダン近郊ドゥオーモンの納骨堂におけるコールとミッテランと同様、式典時に手を握るという象徴的な行為を行っている。演説においてオランダは、独仏の和解がイスラエル・パレスチナにとって先例となりうると強調している。“La réconciliation franco-allemande, un exemple pour le Proche-Orient?”, *Libération*, 3. 8. 2014.

(4) それを象徴するかのよう、2008年にフランスの最後の従軍兵士が死去した際には国民的追悼が行われた一方、その数週間前に同様のドイツの兵士は世論に注目されることなく死去している。Julien, *Asymétrie der Erinnerungskulturen*, S. 13.

限である——イギリスとフランスではそれぞれ 5000 万ポンドなのに対し、ドイツでは 400 万ポンド以下である」と述べている⁽⁵⁾。また同年 5 月に仏紙『リベラシオン』も、ガウクやメルケルが国外での記念行事に参加する予定の一方で、ドイツ本国では連邦政府による記念行事が開催されないことを指摘しつつ、ドイツは無関心なのではなく、むしろ記念の仕方をめぐる「当惑」が障害となっていると論じている⁽⁶⁾。

ただし、連邦政府が一貫して消極的であったわけではない。とりわけ 2013 年末に着任したばかりの外相シュタインマイヤーは、100 周年記念行事専門の担当官を省内に置く一方、2014 年 1 月に『フランクフルター・アルゲマイネ』紙に「1914 年——外交の無力と効力」と題する寄稿を行っている。そこで彼は、七月危機から大戦勃発への過程は不可避ではなかったことを指摘し、当時のように「粘り強い利害調整よりも、情念や思い込みの英断が幅を利かせる」ような事態が繰り返されてはならないと訴えている⁽⁷⁾。シュタインマイヤーにとって、七月危機の二重写しとなっていたのはウクライナ問題であったことはいまでもない。彼のイニシアチブにより、この記事の直後から、外務省はドイツ歴史博物館などと提携しながら寄稿と同名のタイトルの講演、シンポジウムのシリーズ企画が開催され、国内外から歴史家、政治家が招待されている⁽⁸⁾。

3. フィッシャー論争再燃?——クリストファー・クラーク『夢遊病者たち』

このシリーズ企画の第 2 回にあたるのが、3 月に開催された「七月危機——夢遊病者の外交官?」と題するパネル・ディスカッションであった。パネリストは、イギリス、ドイツの二人の歴史家、クリストファー・クラークとゲルト・クルマイヒであり、シュタインマイヤーも出席している。

「夢遊病者 (Schlafwandler)」とは、2012 年に刊行されたクラークの著書『夢

(5) “Lying cold and alone: the war dead Germany struggles to remember”, *The Sunday Times*, 23. 3. 2014.

(6) “L’Allemagne 14-18. La grande gêne”, *Libération*, 2. 5. 2014.

(7) Frank-Walter Steinmeier, „1914. Vom Versagen und vom Nutzen der Diplomatie“, *Frankfurter Allgemeine Zeitung* (以下 FAZ と略), 25. 1. 2014.

(8) „Vom Versagen und Nutzen der Diplomatie“, http://www.auswaertiges-amt.de/DE/Aussenpolitik/Gedenkjahr2014/Veranstaltungsreihe_1914-2014/140304_Veranstaltungsreihe_1914-2014.html (2014 年 10 月 15 日閲覧)。なお、このシリーズの第 3 回には、オーストラリアの前首相ケヴィン・ラッドが東アジアの現状を 1914 年と比較する講演を行っている。実際、ウクライナ危機が深刻化する以前は、第一次世界大戦勃発の歴史的教訓は、もっぱら東アジアの安全保障の観点から論じられ、当時のドイツ帝国と現在の中国の類似性が指摘されていた。„1914/2014: ‚Wiederholt sich Geschichte?‘ - Diskussionsabend zu Sicherheitspolitik in Ostasien im Spiegel der Julikrise 1914“, http://www.auswaertiges-amt.de/sid_9306D62381CFE5172DB6032DEE533173/DE/Aussenpolitik/Gedenkjahr2014/Veranstaltungsreihe_1914-2014/140410-Ostasien.html?nn=669794 (2014 年 10 月 14 日閲覧)。

遊病者たち——ヨーロッパはどのように1914年に戦争へと突入したのか』からの借用である⁽⁹⁾。クラークは、プロイセン史やドイツ皇帝ヴィルヘルム2世にかんする研究ですでにドイツでも評価されていたオーストラリア生まれの歴史家で、ケンブリッジ大学教授である。この本は大戦そのものではなく、開戦プロセスに関する研究書であるが、国際的な反響は歴史学界のみならず政治の世界にも及び、「夢遊病者」はあたかも政治的キャッチフレーズのように使われている。ギリシャ第2党（当時）の急進左派連合の党首アレクシス・ツィプラスは、『ル・モンド』紙とのインタビューで、ギリシャのEUからの排除を示唆するブラフ外交を行うメルケルは「夢遊病者」であると断じる一方⁽¹⁰⁾、ドイツのメディアでは、アメリカ国家安全保障局（NSA）によるメルケルの携帯電話の通話盗聴が同盟の信頼を損なうものとして「夢遊病的」と非難されている⁽¹¹⁾。

特筆すべきは、『夢遊病者たち』が、原版が出版されたイギリスよりも、あるいは同じく翻訳が出版されたフランスなどよりも、むしろドイツにおいて大きな反響を得たという点である。また、同書は同様の議論を開戦以降にも発展させた政治学者ヘルフリート・ミュンクラーの『大戦争——1914～1918年の世界』、重厚で目配りの利いた大戦史概説であるイェルン・レオンハルトの『パンドラの箱——第一次世界大戦史』、コンパクトながら（とはいえ400頁強の）大戦史のグローバルな側面を強調するオリヴァー・ヤンツ『14年——大戦争』などを大きく上回る売れ行きとなった⁽¹²⁾。900頁に及ぶドイツ語版が出版されたのは、英語版の翌年の2013年9月であったが、すでに2014年5月の時点で20万部を突破しており、9月には18版を数え、一説には25万部にまで達しているという⁽¹³⁾。メディ

(9) Christopher Clark, *The Sleepwalkers. How Europe went to war in 1914*, London: Penguin 2012. (独訳: *Die Schlafwandler. Wie Europa in den Ersten Weltkrieg zog*, München: DVA, 2013.).

(10) Alexis Tsipras, "Mme Merkel est devenue la 'Somnambule' de l'austérité", *Le Monde*, 17. 1. 2014. そこでツィプラスは、「メルケル首相自身、クラークの本を読んでいるところだと言っているのだが」、という皮肉を付け加えている。

(11) „Frühkritik: Beckmann und Illner. Wer weckt den schlafwandelnden Giganten?“, *FAZ*, 25. 10. 2013. このテーマについて扱った時事トークショー「ベックマン」(ARD)に、クラーク自身がゲストとして参加している。

(12) Herfried Münkler, *Der Große Krieg. Die Welt 1914-1918*, Berlin: Rowohlt, 2013; Jörn Leonhard, *Die Büchse der Pandora, Geschichte des Ersten Weltkriegs*, München: C.H.Beck, 2014; Oliver Janz, *14. Der Große Krieg*, Frankfurt.M.: Campus, 2013. 興味深いのは、ミュンクラーとヤンツの表題が「第一次世界大戦」ではなく、「大戦争」という英仏で使われてきた用語を用いている点である。さらに2014年には、第二次世界大戦における空爆をめぐる論争的な著作で知られるイェルク・フリードリヒが、連合国側により批判的な大戦史を刊行している。Jörg Friedrich, *14/18. Der Weg nach Versailles*, Berlin: Propyläen, 2014.

(13) 25万部という数字は、2014年9月のドイツ歴史家大会でのパネルにおいて、再びクラークと対談したクルマイヒの発言による。„Historikertag in Göttingen: Der Beginn des Ersten Weltkrieges – eine Jahrhundertdebatte?“, <https://www.youtube.com/>

ア現象となったゴールドハーゲン『ヒトラーの自発的死刑執行人』のドイツ語版が、1996年から2001年の5年間での発行部数の合計が36万5千部であったことを考えれば⁽¹⁴⁾、やはり一つの現象といえるだろう。

紙幅の関係もあり、ここでクラークの議論について具体的に述べることはできないが⁽¹⁵⁾、その特徴は、方法論としては構造史的アプローチによる長期的規定性よりも、事件史的アプローチによる短期的なダイナミズムと関係者の主体性を強調するところにある。彼が「なぜ」という構造史的含意をもつ疑問詞ではなく、「どのように」という事件史的なそれを副題に使っているのは示唆的である⁽¹⁶⁾。こうした政策決定者や関係者の行動や裁量余地を重視する「反宿命論的」議論は、とりわけシュタインマイアークら「危機」のなかで交渉を行う外交関係者にとって、自らの決断がもたらす歴史的意味を再考させる「教訓」と映るのは、ある意味必然といえよう。

一方、内容面で注目すべき点として、一つは、バルカン半島を単なる「火薬庫」としてだけではなく、危機から戦争に至るまでの外交舞台として取り上げていることであり、とりわけセルビアの軍国主義的な側面が強調されている⁽¹⁷⁾。他方、列強の外交政策についても、ドイツよりもむしろ英仏露の協商国側の危機マネジメントに対する評価の方が厳しい印象を与える。そして最終的に、大戦勃発に単独の責任者がいるわけではなく、七月危機は「共有されたヨーロッパの政治文化の結果」であるとともに、「多極的で純粋に相互作用的」であり、それがこの事件を「現代における最も複雑な出来事」にし、原因をめぐる論争も1世紀にわたって続いているのだ、と結論付けられている⁽¹⁸⁾。

watch?v=LNnCAQh9sUE (2014年10月15日閲覧)。

(14) Norbert Frei, „Goldhagen, die Deutschen und die Historiker. Über die Repräsentation des Holocaust im Zeitalter der Visualisierung“, in: Martin Sabrow / Ralph Jessen / Klaus Große Kracht (Hrsg.), *Zeitgeschichte als Streitgeschichte. Große Kontroversen seit 1945*, München: C.H.Beck, 2003, S. 144.

(15) 研究動向における評価として、さしあたり以下を参照。Arndt Weinrich, „Großer Krieg, große Ursachen? Aktuelle Forschungen zu den Ursachen des Ersten Weltkriegs“, Francia, Bd. 40, 2013, S. 233-252.

(16) この点、彼の議論は、ホルガー・アフラバッチの「非蓋然的戦争」論に掉さすものであるといえる。Holger Afflerbach / David Stevenson (ed.), *An Improbable War? The Outbreak of World War I and European Political Culture before 1914*, New York: Berghahn, 2007; Clark, *The Sleepwalkers*, S. xxix.

(17) さらに1903年のセルビアにおける国王暗殺から話を始めていることもあり、セルビアでは『夢遊病者たち』に対する強い反発が起こった。あるセルビアの右派系新聞は、同書は「ヨーロッパの最強国であるドイツが抱く、第一次世界大戦のみならず、ドイツの理解によれば第一次世界大戦によって引き起こされた第二次世界大戦の責任からも解放されたいという願望」に沿って書かれたものと非難している。„Wie Clarks Geschichtsbuch Serbiens Elite umtreibt“, *Süddeutsche Zeitung*, 23. 1. 2014.

(18) Clark, *The Sleepwalkers*, S. 561.

このように、開戦責任をヨーロッパ、とりわけ列強全体の政治指導者たちの独善的な計算違いにあるとするクラークの議論は、裏を返せば英首相ロイド・ジョージの「列強はみな破局へと滑り落ちたのだ」という発言と近いものともいえる。実際、ヴェルサイユ条約第 231 条の単独責任論からフィッシャー論争に至るまで、この問題がドイツの国民意識にとって果たした役割の大きさを考えれば、クラークの解釈は、フィッシャー論争後ドイツ歴史学の主流派の座を追われた国民保守的歴史観の再来を後押しするものではないか、という議論が出てきたことは不思議ではない。しかし見方を変えれば、オーストラリア生まれのイギリスの歴史家によって、ドイツの負の「特殊性」が相対化されたという点では、ジェフ・イリーとデーヴィット・ブラックボーンによる「特有の道」論批判の延長線上として理解することもできなくはない。

前者の立場からの批判は、主にハンス＝ウルリヒ・ヴェーラーやハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラーといったフィッシャー論争後に主流となる社会史、そして「特有の道」論のけん引役となった歴史家たちによるものである。2014 年 7 月に死去したヴェーラーは、前年 12 月のインタビューにおいて、クラークの著書を「またも滑落(説)が出てきた」と語り、「ドイツの立場を免責しようとする風が吹いている」と批判している⁽¹⁹⁾。ヴィンクラーは、クラークが戦争責任問題を脇に追いやることにより、「彼を救世主として崇める」保守的な志向をもつ教養市民の読者を獲得した、と述べ、同書を持った「癒し」の機能を強調している⁽²⁰⁾。

他方、若手の研究者のなかからは、不毛な国民国家単位の「責任論争」に拘泥することは、現在と同様、従来の国際秩序が動揺し、多極化していく大戦前の状況を重視する近年の研究動向に反する、という声が聞かれる⁽²¹⁾。こうした声はとりわけ外交史や軍事史といった、1970 年代以降社会史が主導するようになったドイツ歴史学で脇に置かれてきた分野から出てきたものであった。ただし、このような学術志向の議論は、必ずしも政治的な立場とも無縁ではない。その代表的な例が、2014 年 1 月初めに『ヴェルト』紙に掲載された、ゾンケ・ナイツェルら 4 人の歴史家たちのアピールである。「平和主義と国民国家の克服が両大戦から引き出される唯一想定可能な帰結ではない。昔ながらのドイツの覇権に対する不安は消えておらず、また 1990 年以降の外交政策が連邦共和国のヨーロッパ国家共同体への統合をより推し進めたわけでもない。むしろ逆である。国益に結び

(19) „Interview mit Hans-Ulrich Wehler. Der Krieg war im Oktober 1914 verloren“, *Frankfurter Rundschau*, 18. 12. 2013.

(20) Heinrich August Winkler, „Und erlöse uns von der Kriegsschuld“, *FAZ*, 18. 8. 2014.

(21) Friedrich Kießling, „Vergesst die Schulddebatte! Die Forschung zum Ersten Weltkrieg überwindet liebgewonnene Denkblockaden“, *Mittelweg* 36, Heft 23, 2014, S. 4-15.

つかない人道主義的介入主義は、ドイツの国外では誰も理解しないのである」⁽²²⁾。ここで興味深いのは、ヨーロッパ統合の強化を主張するヴィンクラーらがドイツ一国の戦争責任を強調し、それに対しドイツの国益を重視しようとするナイツェルらが多極的でグローバルな大戦史を主張している点である。こうした世代と分野が重なる形で起こった論争が、学術的にどのような影響を与えるのかはまだ明らかではない。しかし、ヨーロッパにおけるドイツの歴史的な位置付けという、国民意識の中心的要素が変容しつつあることを反映しているといえるのではないだろうか。

4. ヨーロッパの記憶？

クラークの本をめぐる論争は、ドイツに特有の記憶文化、歴史政治 (Geschichtspolitik) の状況を表しているといえる。しかし、それは他国も同様である。たとえばイギリスでは、文部大臣 (当時) マイケル・ゴヴが大戦を侵略者ドイツに対する「正義の戦争」であるとして、学校教育でイギリス愛国心を喚起しようとしたのに対し、野党労働党やりチャード・エヴァンスら歴史家が激しく非難している⁽²³⁾。これまで兵士の自発的同意か強制かで激しい論争が行われてきたフランスでは、論争はむしろ収束に向かい、100周年を機に歴史家たちの「ユニオン・サクレ (挙国一致体制)」が成立したかのように見えるが⁽²⁴⁾、反逆の罪で銃殺された兵士の名誉回復をめぐる議論はなお続いている。他方、政治的、社会的には西ヨーロッパ以上に大戦の影響が大きかったはずの東ヨーロッパ諸国では、沈黙が支配している⁽²⁵⁾。その意味で、「共通のヨーロッパの記憶への道はいまだ遠し」という評価はその通りであろう⁽²⁶⁾。

ただし、道が遠いということは、前進していないことを意味するわけではない。たとえば博物館展示についていえば、ドイツでは国家レベルよりも、州や地域レベルでのイニシアチブによる企画の方がはるかに活発である。これらの展示は、「身近な戦争 (Krieg vor Ort)」として地元出身者の戦争体験を中心に据えており、前線・銃後における彼らの体験が文化的観点から描かれている。その代表的な例として、シュトゥットガルトのバーデン＝ヴュルテンベルク州歴史博物館の

(22) Dominik Geppert / Sönke Neitzel / Cora Stephan / Thomas Weber, „Warum Deutschland nicht allein schuld ist“, *Die Welt*, 4. 1. 2014.

(23) Richard J. Evans, “Michael Gove’s history wars”, *The Guardian*, 23. 7. 2013. イギリスを中心とするヨーロッパ諸国における第一次世界大戦の記憶にかんして、以下を参照。David Reynolds, *The Long Shadow. The Great War and the Twentieth Century*, London: Simon & Schuster, 2014, pp. 385-412.

(24) “Un centenaire de la Grande Guerre très consensuel”, *Le Monde*, 2. 8. 2014.

(25) Krzysztof Ruchniewicz, „Der fremde Krieg“, *FAZ*, 25. 9. 2014.

(26) Christoph Jahr, „Die Jahre 1914-1918 und die Gedenkkulturen Europas“, *Neue Zürcher Zeitung*, 28. 6. 2014.

「地獄のカーニバル―戦争と感覚」が挙げられる⁽²⁷⁾。こうした文化史的展示は、2011年に開館したドレスデンの連邦軍軍事博物館以来ドイツで顕著に見られる傾向であり、イギリスやフランスにおける展示方法とも共通するものである。また同州では、隣接するフランス・アルザス地方やスイス・バーゼル地方と連携して、国境を越えた展示も行われている⁽²⁸⁾。さらに、2014年8月3日にオランダ、ガウク両大統領が訪問した激戦地アルトマンスヴィレールコブには、2017年に独仏共同歴史記念館が落成する予定である。

第一次世界大戦が工業化された近代戦争として特筆すべきであるとするなら、その100周年の記憶も、インターネットによるデジタル・コミュニケーションが大量動員された初めての世界史的記念イベントであるといえよう。果たしてそれが記憶のあり方に変化をもたらすのか、そうであればどのような方向なのか、私たちはまさにその同時代人、当事者として注意深く観察していく必要がある。

(27) Haus der Geschichte Baden-Württemberg (Hrsg.), *Fastnacht der Hölle. Der Erste Weltkrieg und die Sinne*, Stuttgart: Haus der Geschichte Baden-Württemberg, 2014. (展示カタログ) ちなみにこの「地獄のカーニバル」というタイトルは、エルンスト・ユンガーの表現を借用したものである。

(28) Rainer Brüning / Laëtitia Brasseur-Wild (Hrsg.), *Menschen im Krieg 1914-1918 am Oberrhein, Vivre en temps de guerre des deux côtés du Rhin 1914-1918*, Stuttgart: Kohlhammer, 2014. (展示カタログ) さらに、スイスも含めた三国の展示として、バーデン南部のレルラッハにある三国博物館 (Dreiländermuseum) の „Der Erste Weltkrieg - die zerrissene Region“ が挙げられる。詳細なパンフレットが以下からダウンロードできる。<http://www.dreilaendermuseum.eu/de/Ausstellungen/Sonderausstellungen/Erster-Weltkrieg> (2014年10月15日閲覧)。